

(別紙)

梅雨期の大雨・長雨および台風の接近に伴う農作物の栽培管理について

令和8年(2026年)年6月24日
諏訪農業農村支援センター

1 共通事項

- (1) 長雨に備えて、早めに施設やほ場周囲に明きよ等の排水対策を講ずる。
- (2) 滞水したほ場は、早急に停滞水の排水を図る。
- (3) 河川や用水の増水により冠水しやすい場所から、機械類等を移動する。
- (4) 曇天・長雨により病害が発生しやすくなるので、農薬散布と耕種的な防除を徹底する。
農薬散布に際しては適用作物、散布時期・回数・希釈量等、最新の登録内容を遵守するとともに、散布むらや死角となる箇所がないように留意する。
- (5) 露地栽培では、気象情報に留意し防除を行う。また、泥や雨滴の跳ね上がりにより病害の発生を助長するので、ポリマルチ、敷きわら等を敷く。
- (6) 施設栽培では、曇天により軟弱に生育しやすくなるので換気や循環扇等を利用し、温度と湿度をコントロールする。
- (7) 降雨時の収穫及び調製作業は、出荷物の品質が低下しないよう細心の注意を払う。
- (8) 突風に備えて、果樹や野菜・花き類の支柱、施設・温室の外周り他、傷んだ箇所や負荷がかかりやすい箇所から優先して点検、補強する。
- (9) 気象台等による最新情報に留意し、危険を伴うほ場見回り、作業等は極力避ける。
- (10) 土壌伝染性の病害虫(疫病、根こぶ病、シストセンチュウなど)が認められるほ場では、まん延防止のため、特に土壌流亡が無いように努める。

2 水 稲

- (1) 事前に排水路の詰まり等の点検・補修を行い、冠浸水時の速やかな排水に備える。
- (2) 大雨等で茎葉が長時間にわたって水没することがないように、冠水した場合は、早めに排水を図り、流入した異物などを除去するとともに稲体に付着した泥を洗い流す。排水後は黄化萎縮病、いもち病、白葉枯病の発生に注意する。
- (3) 除草剤の使用に際しては、雑草の発生状況に留意して農薬登録に記された散布適期の範囲内で遅れずに散布する。また、散布直後の大雨により田の水が溢れ、除草剤の効果が低下することがあるため、散布タイミングに留意する。
- (4) ほ場を確認し葉いもちの発生が確認され次第早急に薬剤散布を行う。いもち病対策の苗箱施薬剤未使用田、山間地域の常発地域では特に注意する。

3 大豆、そば

- (1) 停滞水をできるだけ早く排除できるよう、排水路を点検、整備しておく。
- (2) 転換畑における播種後の大豆ほ場、収穫前のそばほ場では、排水口、暗渠を開け、速やかに排水を行う。
- (3) 転換畑における播種前の大豆及びそばほ場では、事前にほ場周囲溝の施工、排水口や明渠を開け、排水を行い、土壌の乾燥を促し播種作業に備える。
- (4) 大豆作において、降雨により準備した除草剤の散布が遅れた場合は、指導機関に相談し、生育ステージにあった有効な除草剤を選択し散布する。

4 野菜（施設の強風対策は8を参照）

【野菜共通】

- ・長期滞水による根傷みから、生育不良や病害の発生が懸念されるので、滞水しやすいほ場では畑の周囲へ排水溝を設置して速やかな排水に努める。
- ・強風や雨により病害発生の恐れがあるので、降雨後、速やかに殺菌剤の散布を行う。

(1) レタス類

降雨に伴い病害の発生が増えてくる。これからの時期、べと病や細菌性病害（斑点細菌病、軟腐病、腐敗病）の発生が多くなる。現地で栽培されている品種の特性に留意して防除対策を講じる。

(2) アブラナ科野菜

黒斑細菌病等の発生が増加するので、育苗期から発病状況に留意し、防除対策を講じる。他の細菌性病害（軟腐病、黒腐病など）についても、時期を失ないように防除を行う。

(3) アスパラガス

立茎期がほぼ終了し、今後、夏芽の収穫期に入り茎枯病の二次感染が始まる時期でもあるため、薬剤散布により茎枯病の防除を図る。支柱やフラワーネットの補強を行い、強風による倒伏と茎葉等の損傷を防ぐ。

(4) セルリー

梅雨の降雨により、斑点病や葉枯病、その後は軟腐病など病害の発生が増加するので、防除を徹底する。また、生育状況に応じて、カルシウム剤などの葉面散布を行う。

(5) きゅうり

曇雨天が続くと、軟弱徒長気味になりやすい。古葉、病葉、日陰を作っている葉を摘除し葉の更新と側枝発生を促す。側枝の発生が弱い場合は、摘心を遅らせる。奇形果や病果は早めに除去し、草勢維持を図る。各種病害が混発することが予想されるので、風通しを良くするとともに予防防除、早期防除に努める。支柱の補強を行い、強風による倒伏と茎葉等の損傷を防ぐ。

(6) スイカ

曇雨天が続くと着果不良が懸念される。交配作業は開葯を確認して、ていねいに行うとともに交配後の保温に努める。降雨中の交配作業では、雌花及び花粉が雨でぬれないように注意する。

(7) ブッキーニ

天候不良時の着果安定策として着果ホルモン剤の活用や人工授粉を徹底する。スイカと同様に花粉が降雨等の水滴に濡れないように留意する。

(8) 施設トマト、カラーピーマン

ア トマトは過繁茂になりやすいので、側枝、下葉の摘除は早めに行う。

イ カラーピーマンは主枝の誘引が遅れないように作業を行う。中段付近の着果が不安定となることから、状況に応じて側枝着果を行い、全体の着果量を確保する。

(9) ジュース用トマト

着果ホルモン剤の確実な処理により、着果を促すとともに、立性品種では株分け作業を適宜行う。炭疽病や疫病、オオタバコガ等に注意して下葉等に薬液がかかるよう防除を行う。

5 果樹

【果樹共通】

- ・水が停滞しやすい園ではあらかじめ明きよ等の排水溝を整備しておく。

- ・水害による樹体への影響は、樹勢によっても異なるので、適正な樹勢の維持を心がける。
- ・長時間の滞水は根や葉の呼吸を阻害し、生育不良や枯死を招くので、滞水している園地では、明きよなどにより速やかな排水に努める。
- ・土砂が流入した園では、根の呼吸を助けるため、なるべく早く樹冠下の土砂を取り除く。

(1) りんご

- ア 曇雨天が続くと低日照となるので、徒長枝の間引きや枝吊り、誘引、支柱立てなどの夏季管理を行い、日照の有効利用を図る。併せて、農薬散布時の散布むらを解消する。
- イ わい性台木は耐水性が劣るので、わい性台木樹園では、特に排水対策の徹底を図る。
- ウ 黒星病、黒点病、斑点落葉病、褐斑病、炭そ病、輪紋病などの病害の発生が懸念されるため、地域の防除暦に従い、適正な間隔での防除を励行する。
- エ 強風が予想される場合は、樹の倒伏・折損を防ぐために、防風ネットの点検、支柱の追加、主枝の固定等を行う。腐らん病や虫害発生箇所等の障害部は折れやすいので、しっかり固定する。また、3～6年生程度の若木は倒伏しやすいので、主幹部に支柱を添えたり、トレリスの固定を確認するなど、防止策を徹底する。
- オ 特に苗木は倒伏しやすいので、支柱にしっかり固定する。
- カ 防鳥ネット、防雹ネット等の設置園では、風の状況によりネットの巻き取りや除去を行う。
- キ 定期防除をしていない場合は台風が接近する前に実施する。

(2) ぶどう

- ア 副梢の切除や摘心、棚付けなどの新梢管理を徹底し、果房の損傷を防ぐとともに、枝が風で振られないようにする。
- イ 摘粒を速やかに行い、早めに袋かけを実施して、薬剤散布を実施できるようにする。
- ウ 無核品種は、ベレーゾン期となる7月中旬以降に雨が長引くと、果実肥大が促進され着色が遅れる傾向となりやすい。新梢管理で受光体制を整え、適正着房量を厳守することで正常な成熟を促す。特に、裂果しやすい品種では徹底する。
- エ 多湿多雨が続くことによってべと病、晩腐病の発生が心配される。防除適期を逃さないよう留意し、散布むらのないよう十分量を散布する。
- オ 雨よけ施設では、風の状況によりビニールの巻き上げを行い、施設の倒壊を防ぐ。
- カ 強風が予想される場合には、棚の周囲に防風ネット等を張り、風による落果や枝の損傷を防ぐ。
- キ 棚の上下動に伴う枝の損傷や果実落果を防ぐために、アンカーの補強、棚線の締め直し、ゆるんだ誘引部の補強等を行う。特にAマストの棚は、強風により棚全体が上下動しやすいため、アンカーの補強を徹底する。
- ク 防鳥ネットや防雹ネット設置園では、風の状況によりネットの巻き取りや除去を行う。

(3) もも、その他核果類

- ア 支柱立てや枝吊り、徒長枝の間引きを行って受光体制を整える。また、曇天が続くと光合成量が減り、袋かけにより生理落果することがあるため袋かけは適期に行う。
- イ 梅雨期が長引いた場合は、灰星病などの腐敗病が問題となるので、定期的な防除を実施する。また、せん孔細菌病の発生にも注意する。
- ウ 除袋後であっても、雨が多い場合は追加防除を行う。反射マルチも一時片付けて実施する。
- エ 曇天が続くと果肉先行・着色不良となるため、過熟果とならないよう、適期収穫を心がける。
- オ もものせん孔細菌病は強風と降雨により感染が拡大するので、必ず予防的に散布しておく。

カ すもも及びプルーンは、灰星病、炭疽病などの腐敗果の発生や過熟果に留意する。なお、スモモヒメシクイの多発期にもなるため、防除を徹底する。

ク (1) りんごのエ〜キを参照。

(4) なし

ア 根の活性を下げないため、明きょなど排水対策を徹底する。

イ 新梢管理を行って日照を有効に利用する。

ウ 黒星病、黒斑病の発生が懸念される。適正な間隔での防除を励行し、防除徹底を図る。

エ (2) ぶどうのカ〜クを参照。

6 花 き

(1) 施設栽培（施設の強風対策は8を参照）

ア 日照量が不足すると着蕾数の減少や軟弱化など品質への影響が大きいため、曇天時は受光を遮る資材等は一か所にまとめて、施設内に十分光が入るように留意する。また、受光状態と風通しの改善のため、間引き、下葉整理など茎葉管理を徹底する。

イ 曇天が数日続いた後に、強光・高温に遭遇すると葉先枯れ（チップバーン）が発生しやすいので、梅雨間の晴天時は、早めに遮光資材を展張する。また、曇天時も積極的に換気を行い、風通しの改善を図る。

(2) 露地栽培

ア 支柱やフラワーネットの補強を行い、強風による倒伏と茎葉等の損傷を防ぐ。

イ キクの白さび病、リンドウの葉枯病などの発生が多いので、降雨の状況を見て雨間に殺菌剤の予防散布を行う。

ウ 泥や雨滴の跳ね上がりによる病害発生や生育不良が起きやすいので、防止対策（マルチ、敷きワラなど）を行う。また、風雨により倒伏したものは、早めに起こして茎の曲がりを防ぐとともに、殺菌剤の予防散布を行う。

7 畜 産

(1) 事前に畜舎周辺の排水対策を実施するとともに、汚泥はすみやかに除去する。

(2) 畜舎周辺を十分に点検し、雨水の流入、浸水等がないように周囲に排水溝を設ける。

(3) 伝染性疾病や衛生害虫の発生が危惧されるので、消石灰等を畜舎や堆肥舎の周囲に散布して乾燥を図るとともに、消毒車等により徹底した消毒、防除を行う。

また、家畜の外傷の有無を確認し、異常を認めた場合は、速やかに獣医師又は、農業共済組合、家畜保健衛生所に連絡し必要な措置を受ける。

(4) 湿度が高まると飼料の変敗がおきやすいので、飼槽の状況を良く観察して残った飼料は早めに掃きだすなど、清潔にして乾燥を図る。

(5) 土砂が著しく付着した粗飼料は、給与をとりやめる。

(6) 冠水、浸水した飼料畑は、明きょ等を設け早期排水に努める。

(7) 湿害が見られる牧草類は追肥を行い、草勢の回復を図る。

(8) 倒伏等により生育中途の青刈飼料作物を給与する場合は、硝酸塩中毒の恐れがあるので給与量に注意する。

(9) 牧草は刈り遅れないように注意し、高水分の場合は、サイレージ用乳酸菌資材を添加し、ラップの巻き数を増やしサイレージに調整する。

(10) 停電に備え、搾乳機やバルククーラーの電源確保のための自家発電機の点検を行う。

(11) パイプハウスの畜舎及び堆肥施設は強風による被害を受けやすいので、隙間風が吹き込まないように破損部の修理を行う他、支柱・筋交い等の補強を行う。また、フィルム（ビニール）

が飛ばされないよう、緩みやマイカー線の点検を行う。

8 園芸・農業用施設全般の強風対策

- (1) 強風に備えて、ハウスや畜舎及び堆肥施設等の破損部の修理、支柱・筋交い等の補強を行う。特に、被覆フィルムが飛ばされないよう、らせん杭やマイカー線、フィルム止め具の点検を行う。収穫物がある施設では、周囲に排水溝を設け増水による湛水害を防ぐ。
- (2) 原則として、サイドフィルムのあるパイプハウスでは、サイドフィルムを下ろし、妻面部分もフィルムで覆って、すきま風が入らないようにする。ただし、日中気温の高い状態ではハウス内の作物を優先させて開放とする。台風通過後は、速やかにハウス内の換気を図る。
- (3) 収穫を終えて使用していないハウスは、被覆資材（フィルムやネット等）を取り外して風圧による倒壊を防ぐ。
- (4) 強風により倒壊が心配される場合は、最終手段として被覆フィルムを切り裂き、風圧を軽減する手段も検討する。ただし、強風の中の作業は大変危険なので、安全に十分配慮して作業を行う。